

「アジアにおける持続的な水産増養殖と環境に関する 国際セミナー」報告

山本 淳^{1*}, 越塩俊介²

Report on “International Seminar on Sustainable Aquaculture and Environment”

Atsushi Yamamoto^{1*} and Shunsuke Koshio²

Key words : core university program, seminar, Philippines

Abstract

The international seminar on sustainable aquaculture and environment, which is one of the activities of the Core University Program between the Faculties of Fisheries, Kagoshima University and the University of the Philippines in the Visayas, sponsored by Japan Society for the Promotion of Science (JSPS), was held on October 16 and 17, 2004 at Inamori Memorial Hall, Kagoshima University. The participants consisted of members of the Core University Program, selected on the basis of the outcomes for their cooperative researches, and invited speakers from Malaysia, Indonesia and Thailand. Twenty-two papers were presented comprising several outcomes that had been expected in the beginning of the program: methodology for environment-friendly seed production, improved culture techniques for sustainable biological reproduction, and development of environment-friendly and disease resistant feeds.

1998年から始まった鹿児島大学水産部とフィリピン大学ビサヤス校の間の拠点大学方式による研究協力事業は、「フィリピンにおける水産資源および水圏環境の開発、管理、保全に関する研究協力プロジェクト」を標榜している。本事業は、フィリピン水産業の効率のかつ持続的開発への貢献を目的とし、わが国とフィリピンとの国際学術交流を通じて両国の水産学全般に関する研究を推進することを目標としている。この事業の一環として2004年秋には鹿児島大学において「アジアにおける持続的な水産増養殖と環境」に関する国際セミナーが開催されたのでその概要を報告する。

1. セミナーの概要

開催日：2004年10月16, 17日

場所：鹿児島大学稲盛会館

参加者：フィリピン大学ビサヤス校, マレーシア大学, シンガポール・ゴンドール研究所, タイ・ソングクラ大学, 鹿児島大学水産学部から45名。

セミナーの目的とプログラム：沿岸環境を破壊することなく環境と調和できる合理的な水産資源の利用を目指し、フィリピンにおける持続的増養殖のためにそれまで行ってきた研究成果を発表し、交流事業による増養殖の発展とこれからの方向性について展望した。

¹ 鹿児島大学水産学部資源育成科学講座 (Department of Aquatic Resource Science, Faculty of Fisheries, Kagoshima University, 4-50-20 Shimoarata, Kagoshima 890-0056, Japan)

² 鹿児島大学水産学部資源利用科学講座 (Department of Biochemistry and Technology of Aquatic Resources, Faculty of Fisheries, Kagoshima University, 4-50-20 Shimoarata, Kagoshima 890-0056, Japan)

* Corresponding author, Email: ayam@fish.kagoshima-u.ac.jp

セミナー第1日には21の講演があり、このうち、フィリピン側の発表が17演題、日本、マレーシア、インドネシア、タイがそれぞれ1演題であった。第2日には6つの講演があり、このうち、フィリピン側の発表が5演題、日本の発表が1演題であった。

2日間を通じてフィリピンの講演は22演題でそれらの内訳は、フィリピン国内における水産増養殖の社会・経済価値に関するものが2演題、milkfishおよびrabbit fishの稚魚飼育に関するもの2演題、魚類の養殖方法に関するもの2演題、養魚飼料に関するもの2演題、餌料生物の培養に関するもの2演題、無脊椎動物に関しては、mud crabの発生とその養殖環境に関するもの4演題、エビ養殖に関するもの2演題、二枚貝の再生産と資源に関するもの2演題、水生植物に関するもの2演題、サンゴ礁およびマングローブに関するもの2演題であった。日本側の発表は魚類飼料に関するものとクルマエビの生態防御に関するものがそれぞれ1演題であった。また、マレーシア、インドネシアおよびタイからのゲストスピーカーによる講演はそれぞれの国における水産増養殖産業の社会的位置に関するものであった。

フィリピンおよび日本の発表の中でも、疾病対策に関する講演は6演題と多く、これはtilapiaやgrouperのみならずエビ類養殖においても、疾病による被害量（金額）が深刻であることを意味するものと窺われた。

2. 成 果

本年のセミナーは「アジアにおける持続的な水産増養殖と環境」をテーマに開催された。これまで、フィリピン沿岸域の環境破壊を招かない増養殖のための技術開発を推進し、種苗生産技術の更なる開発、環境にやさしく健康な魚類を生産するための配合飼料の開発、フィリピンでの増養殖における最適生産システムの確立、ラグーンを使った増養殖と環境との共存、魚類疾病の防除と対策などを扱ってきた。今回発表された内容はこれらの取り組みの結果であり、生産性に関して多に貢献するものと期待される。今後は次のステップとしてこれら養殖魚介類を健康に生産するための方法、すなわち、免疫賦活剤や生物製剤の投与による養殖魚の生体防御能の向上、養殖環境における病原体のバイオコントロール、無脊椎動物の生体防御システムの解明などを中心にした研究の必要性が明らかとなった。



Fig. 1 Seminar participants in Inamori memorial hall



Fig. 2 Banquet at Kagoshima Sun Royal Hotel